

ピックアップ・ラヴァー!

Kozue & Tsukasa

槇原まき

Maki Makibara



エタニティ文庫

目次

第一章	ゴミ捨て場で拾った男の子	5
第二章	逃げる条件と、逃がさない条件	38
第三章	お試しの恋人？	91
第四章	大人の駆け引きと、心を占める割合	148
第五章	素直になれない二十九歳	204
第六章	<small>みかげつかさ</small> 三影司という人	281

第一章 ゴミ捨て場で拾った男の子

1

「アイツの荷物なんか全部捨ててやるんだから！ 誰が都合のいい女よッ！ わたしをナメンじゃないわよ！」

広々とした2LDKの部屋で、和泉こずえは激怒していた。怒りに任せて元カレの私物をつぎつぎとゴミ袋に突っ込んでいく。

合い鍵を取り返し、元カレと女を部屋から叩きだしたのは昨日の昼過ぎのこと。それ以降ずっとこの調子だ。

躊躇いなく捨てられるのは、ヤツが着ていたパジャマ代わりのスウェットも、予備として置いておいた着替えも、メンズサンダルも、食器も、全部こずえが買った物だから。

『やっくん、健吾おっ。この部屋でするとはげしーっ！』

『この家主は俺にベタ惚れだからな。ぜってー気付かねーし。おまえもホテルより興奮するだろ?』

『そんで、アタシとヤツたあとに彼女サンとするんだあ?』

『しねーよ。最近アイツとしてねーし。この部屋には飯と風呂に帰ってるだけ。駅近だしな』

『彼女サンかわいいそーっ! 健吾に「都合のいい女」扱いされてるう〜』

出勤したはいいものの、シフトの確認ミスで実は休みだったこずえが、のんびりとウインドウショッピングとランチを堪能してから帰宅してみれば、彼氏である——いや、もう別れたから元カレか——大杉健吾が、部屋に女を連れ込んでお楽しみの真っ最中。おまけに相手の女からも馬鹿にされ、こずえのプライドはもうズタズタだ。

脳裏に蘇ってきたその光景に、「泣くな、泣くな」と自分に言い聞かせ、唇を噛む。

女が纏っていたバナラのような甘ったるい香水の匂いを消そうと、ベッドの周りに無香タイプ消臭スプレーをこれでもかと吹きつけてやった。昨日から何度も使っているお陰で、すっかり空になってしまったスプレー容器をベッドに投げつける。

「……馬鹿にして!」

悔しさと、やるせなさ、情けなさ、そして言いようもない惨めさが込み上げてきて胸が痛い。その痛みもゴミと一緒に捨ててしまえばどんなにいいだろう。

付き合ってから九年。友達から「尽くしすぎ」と言われるほど、真っ直ぐに尽くしてきた結果がこれだ。

こずえは天井を見つめて涙を堪えた。自分を裏切った男のために泣いてやるなんてバカバカしい。自分の涙はそんな安い物じゃないんだと鼻を吸る。

(絶対許さない! 健吾の顔なんてもう見たくない!)

こずえはキツと前を向いて立ち上がった。

汚されたシーツをはじめとした不要品でパンパンに膨らんだゴミ袋が、六つもできている。これらを全部捨てて、部屋と気分をスッキリさせるのだ。

もちろん、部屋の鍵だって替えてやる。健吾を思い出させる物は全部処分して新しくしよう。いつそベッド自体替えてしまおうか。

そんなことを考えながら、重たいゴミ袋を両手に一つずつ持って部屋を出る。

外に出れば、秋の気配を感じさせる涼しい風が吹く。昨夜降った雨によってできた水溜まりに、朝日がキラキラと反射していて眩しい。ちゅんちゅんと歌う雀達が、「あんな男は別れて正解よ」と慰めてくれるような気がしてくる。

独り身になったのは喜ばしいことだと自分に暗示をかけながら、マンションの一角にあるゴミ捨て場に向かったのだが……数秒後、こずえはわけのわからない悲鳴を上げる羽目になった。

「あダ\$う%ぎゃ◇&せ※あびヤ〒@——!?!」

ゴミ捨て場にいたのは、大の字で寝そべり、頭から血を流した男——
二十九年間の人生の中で、これほど大声を上げたことがあっただろうか。

思わずゴミ袋を取り落とし、両手で口元を覆う。百メートルを全力疾走した時のように心臓がバクバクしていて、口から飛び出すかと思っただくらいだ。

こずえは震えながら、キョロキョロと辺りを窺う。

まだ早朝のせいかゴミ捨て場の周囲には誰もいない。

こずえは積み重なったゴミ袋をベッドにして横たわる男を、恐る恐る覗き込んだ。

靴は片方なく、ジャケットも袖が破れている。ネクタイはしているが、薄汚れてボロボロだ。眉の上と口元から血を流し、青白い顔のままピクリとも動かないその人は、死体にはしか見えない。さながらサスペンスドラマのようだった。

「——し、死んでるの? え……ウソでしょ……信じらんない……」

見間違いだと思いたかったが、何度まばたきしてみても、倒れている男は目の前から消えてくれない。否が応でもこれが現実だと理解して、こずえは改めてうろたえた。

「そ、そうだ……だ、誰か、誰か、人! そう、ひ、人呼ばなきや! け、警察も救急車も! どっち!?! さ、殺人事件だから警察!?! 警察って——九番だっけ!?!」

恐怖のあまりパニックを起こしながらも、こずえはジーンズのポケットに手をやって

携帯電話を探す。しかし携帯がない。ちよつとゴミを捨てるだけのつもりだったから、部屋に置いてきてしまったのだ。

「へ、部屋に戻って、警察呼ばなきや、警察……警察……」

「——ケーサツなんか呼ばないでいいよ」

電話を掛けることしか頭になかったこずえの耳に、気怠そうな若い男の声が聞こえてきた。声のするほうに目を向ければ、ゴミ捨て場にあつた死体の手がヒラヒラと動いている。

「ヒッ! う、動いた!? 生きてるの!?!」

「生きてるよー、死んでない、死んでない。ヘルプミー」

元気をアピールするような軽い口調で、死体——もとい生きていたらしい彼は、こつちに向かつて両手を突き出した。

「悪いんだけど、起こしてくれないかな? ちよつと身体に力が入らなくって」

「う、うん……」

動転しながらも、言われるままにゴミ捨て場の彼の手を引っ張る。

「ありがとう。おーとととと……」

彼はふらつきながら、ゴミ捨て場を囲うコンクリートの壁に手をついた。

「ちよ……ちよつと、あなた大丈夫なの? 警察じゃなくて救急車呼ぶ?」

「救急車だなんて勘弁して。そんな大袈裟にしなくていいって。軽い脳震盪だから。大丈夫、大丈夫。タクシー拾って帰るし、ありがとう」

彼はそう言ってへらっと人懐っこく笑うが、その口元には血が滲んでいて痛々しい。おまけにかなり臭う。このゴミ捨て場はルールを守らない一部の住人により、回収日のかなり前から生ゴミが捨てられていたりするので。

いくら本人が大丈夫だと言っても、こんな状態でタクシーに乗るなんてテロ行為みたいなものだろう。

「あなた、それでタクシーに乗るつもりなの？」

「あ。僕、臭い……かな？ やっぱりマズイ？」

「……かなり、ね。正直、タクシーはやめたほうがいいと思うわ」

くんくんと自分の臭いを嗅ぐと、彼はうへっと吐き出すように顔を顰めた。

「ん〜。でも、まあ、なんとかなるでしょー」

そう言っつてよろしながらも、大通りに向かって歩いていこうとする。その彼の後ろ姿を見て、良心がズキッと痛んだ。

怪我でボロボロになって、立ち上がるのだから自力でできなかった人をこのまま見捨てるのか？ 自分はそんな薄情な女なのか？ 何かしてあげられることはないのか？ いいやあるはずだ。何もしないじゃ女がすたる。

（ああ——もう！）

こずえは意を決して彼を呼び止めた。

「ちよつと待って！ ウチに来る？ そんなでシャワー浴びなよ。臭い落としてから病院行こ？」

言われた内容が余程意外だったのか、彼はまじまじとこずえを見つめてくる。そして次の瞬間、嬉しそうに顔をほころばせた。彼に尻尾があったなら、きつとブンブンと勢いよく振られていることだろう。

「ええ!? マジで？ あんたすつげー良い人だなあ……。サンキュー助かる！」
これが、「彼」との出会いだった。

「入って。こっちの右のドアがお風呂。左がトイレよ」

こずえは彼を自分の部屋に連れてくると、最初に風呂に入るよう促した。とりあえず、身体を洗ってもらわねば。臭いに加えて、彼の靴は片方しか残っておらず、靴下も泥だらけでその足で家の中を歩き回られるのは正直困る。

スタスタと部屋に入っていくこずえを追って、彼も中に入ってきた。

「綺麗なマンションだね。お邪魔します」

床を汚すのを気にしたのか、彼は律儀りぎに玄関で靴下を脱いで、つま先立ちで歩いている。「うわーお！ 部屋広いねえ！」

「まあね」

ゆったりしたリビングがこのマンションの売りだ。広くて駅近えきかとくれば、当然家賃もとんでもなくお高い。だが、ここは伯父が持っている物件なので、こずえはタダ同然で住めている。会社にも歩いて行けるといふ素晴らしい立地にあり、まさに最高の住み処すまひかといえるだろう。

「タオルは洗濯機の上の棚に入ってるから、勝手に使っちゃダメだよ」

「ごめんね。ありがとう。それじゃあ、お借りします」

頭を下げて風呂場に消えた彼を横目で見て、自分の行動が軽率だったのではないかと、こずえは今更ながらに思いはじめた。部屋に戻ったことで、少し冷静になったのかもしれない。やっぱり警察に通報したほうがいいかと迷う。

（あんな所でぶつ倒れてるなんて、絶対ヤバイ人だよ……ワケありかな。ああもう、なんで拾っちゃったんだろ……。でも、あれで死なれたら寝覚めが悪いし……）

自分のお人好し具合を後悔しながら携帯を手を取った。だがそこで、「大袈裟おおげさにしなくていい」と言った彼の言葉を思い出す。それは、「大袈裟おおげさにしないでほしい」という彼の頼みに聞こえなくもない。

（……うーん……どうしたものか……）

あれこれ考えた挙げ句、結局通報するのはやめた。

彼自身は悪い人間に見えないし、どうも喧嘩けんかの被害者のような気がする。それにあの怪我なら、自分に何かすることはないだろうという結論に至ったのだ。

「あ、服……」

ふと、彼に着替えを渡すのを忘れていた。

彼の服はボロボロで、もう着られたものじゃない。でもちようどいいことに、別れたばかりの元カレの服がたっぷりある。どうせ捨てるつもりだったのだから、人助けに使うほうが有意義だ。彼は見た感じ健吾より細めだったし、サイズは問題ないだろう。

こずえはゴミ袋を開けて適当に服を選ぶと、脱衣所のドアを軽くノックしてから開けた。

半透明のドアを一枚挟んだ向こうからは、ザーッとシャワーの流れる音がする。

「ねえ、服！ ここの籠かごに入れておくからねー!!」

シャワーの音に負けないように声を張り上げると、

「えーっ？ なーにー？」

と、思ったより大きな声で彼が応えてきて、唐突にドアが開いた。

「きゃっっ！」

「わっ！」

髪の毛の先からポタポタと雫を垂らした全裸男の顔が、一瞬キョトンとしたかと思っ
たら、見る見るうちに照れ顔に変わる。そして勢いよくドアが閉められた。

「ご、ごめん!! ここにいるって思わなくてさ! ホントごめん!」

初めての部屋だし、シャワーも出していたから音の距離感が掴めなかったかもしれな
いが、いきなりドアを開けることはないだろう。結果的に彼のシャワーシーンを覗いた
形になってしまい、こずえのほうがばつが悪い。

こちとら男の裸なんて見慣れてるつてのよ! 大の男が照れてんじゃないわよ! 逆
にこっちが恥ずかしいじゃないのよ! ——なーんて言いたいところだが、実はこずえ
の経験は別れた元カレ一人だけだったりする。しかもここの一年くらいは女として相手に
されていなかった。

健吾は、二十歳を過ぎてようやくできたカレシだったから、嬉しくつて妙に張り切っ
てしまっていたのかもしれない。家賃を払わなくていいから余裕があったこともあって、
細かなお金を貸したりもしていた。

要するにこずえはお人好しの上に、尽くしすぎて男をダメにするタイプの女なのだ。
今思えば、彼の浮気の痕跡はところどころにあった。やたらと服装や髪型に気を使う
ようになった時期があったし、こずえの休みの予定を聞いても自分のことは話さなかつ

たり、一緒に行ったことのない明らかにカップル向けの店を知っていたり。

恋は盲目とはよく言ったもので、現実を目の当たりにするまで、元カレの浮気に気付
けなかった。そんな自分の愚かさが胸に痛い。

余計なことを思い出して憂鬱になりながら、こずえは持ってきた服を籠の中に入れた。
「こっちこそゴメン。服は籠に入れとくから! サイズはししくないんだけど、いいか
なー?」

「……ハ、ハイ、ダイジョブデス。ア、アリガト、ゴザイマス………」

なぜかカタコトで御礼を言われて、首を傾げる。

さっきまでは比較的碎けた口調だったのに、裸を見られたのがそんなにショックだつ
たのだろうか? 正直、一瞬だったからほとんど見えなかったのだが、それを弁解する
のも白々しい気がして、出ていったことがわかるよう、わざと大袈裟に脱衣所のドアを
閉めた。

リビングに戻れば、壁時計は朝の七時を指している。いつもなら九時の出勤に合わせ
て朝食の支度をしている時間だ。

今日は土曜日だが、こずえは出勤日になっている。

まだメイクをするには早い時間だが、見知らぬ男にスッピンを晒し続ける勇氣はない。
寝室に入って、パウダーを軽くはたいて口紅を塗る。

メイクは出勤前にきちんとやり直すことにして、キッチンに入った。お腹を空かせているに違いない彼の分の朝食も用意することにしよう。シャワーを覗き見してしまったお詫びだ。

ベーコンを下敷きにして目玉焼きを二人前作り、パンをトーストする。冷凍しておいた作り置きのパールキャベツを具にしたスープを作り、それらをテーブルに並べていると、渡したスウェットを着た彼がリビングに入ってきた。

「あのー。シャワーと服、ありがとうございました」

深々と頭を下げた彼の手には、さっきまで着ていたボロボロの服がある。

急に畏まった話し方に苦笑いしながら、こずえはそのボロボロの服を「捨てとこうか?」と指差した。

「あ、いえ。自分で持つて帰ります。そこまでして頂くわけにもいきませんので」

「そう? じゃあ、何か紙袋持つてくるね」

キッチンボードをガサガサ探っていると、彼が後ろから声を掛けてくる。

「あのー。朝早くからお騒がせして本当にすみませんでした。僕、旦那さんに一言ご挨拶を……」

「ハア!? だ、旦那!?!」

聞きなれない単語に驚いて振り返ると、落ち着かない様子の彼がいた。

「え、だって、この服、旦那さんのじゃないんですか? 洗って返しますので、やっぱりご挨拶しておいたほうが……。あ、それとも、彼氏さんの?」

着ている服の胸元を軽く引つ張りながら、彼は二人分の食事が並んだテーブルに目をやる。

(……ああなるほど、なるほど、そういうことか)

彼が急に畏まった話し方になった理由がわかった。

二人分の食事が用意してあって、男物の服がすんなり出てきて、さらに女が一人で住むには広いマンションとくれば、「旦那」がいると思うのも無理はない。

確かにこの歳にもなれば、同級生の半数以上が結婚しているわけだが。

(わたしは独身よ——ッ!)

と、心の中で叫ぶだけ叫んで、こずえは大きめの紙袋を彼に手渡した。

「いいのよ。あなたが着てるソレ、実はゴミなの。別れた元カレの服なわけ。正直見たくもないから、あなたが処分してくれたら嬉しいわ。間違っても返してこないでね」

すると、さっきまで落ち着かない様子だった目の前の彼が、一気に表情を緩めて床に座り込んだ。

「マジで? 独身? 普通に結婚してると思って緊張したよ! ご飯だって二人分あるからさ」

「独身で悪いか！ 拾った犬ところには、お風呂とご飯を用意するって、相場が決まってるのよ」

「じゃあもしかして、あれ僕の!?」

こずえが腰に手を当てて仁王立ちしながら顔を覗き込むと、彼は目をキラキラさせ見上げてくる。その目があまりにも人畜無害そうで綺麗だったから、思わず笑ってしまった。

「そうだよ。あれは君のご飯」

「ほんとに？ 何、女神!?」

「はいはい」

女神だなんて大袈裟な例えを、鼻で笑い飛ばす。

自分はそんな神聖なものじゃなく、ただの二十九歳独身女だ。今なら男と別れたばかりなんていう、悲しいオプシヨンまで付いてくる。

「ちよっと、食べる前に傷口見せて。病院にはあとで行くとして、傷口だけでも覆ったこう。痛々しくって見てらんないよ」

彼の戯言はさっさと流し、チェストの引き出しから救急箱を出してローテーブルの上に置く。ソファに彼を座らせ、軽くウェーブした長めの前髪を上げさせると、ぱっちりとした二重の目が出てきた。

(あら、よく見たら可愛い顔してるじゃない)

眉の上や口元が切れて痛々しいのが残念だが、それでもかなりかっこいい。ケガがなければ芸能人に見えないこともない。

肌のキメの細かさを見て、年下だと勝手に判断する。自分よりも二三歳下だろうか。スーツを着ていたから学生ということはないだろう。身長は高すぎず低すぎず、身体つきは中肉中背。

男のくせに可愛らしい顔立ちにちよっと嫉妬しながら、傷口を覆う大きめの絆創膏を貼り付ける。

「もう。こんなに傷を作って。いったいどうしたの？ 喧嘩？」

手当をしながら聞くと、彼は表情豊かな眉を下げた。

「んー……良かれと思ってしたんだけど、なぜか怒られちゃった——みたいな？」

「え、何それ？ 誤解されて殴られたってこと？」

「知らない。他人にどう思われていようと興味ないし。でもさ、だからって殴ることないと思うんだよね。あー痛い、痛い」

背中も痛いと言うので上着を脱いでもらったが、日焼けなどまったくしておらず、結構な色白だ。今は肌のあちこちに痛々しい打撲の痕があるものの、引き締まったイイ身体をしている。

中肉中背は、やや筋肉質に訂正。

喧嘩の原因はわからないが、彼は自分の名前を名乗らないし、肝心なところはぼかして話をしている。要するにあれこれ詮索されたくないということなのだろう。それなら——と、こずえも深くは聞かないことにした。背中の青あざに湿布を貼って、なんとなく相槌を打つ。

「ふーん？ 色々あるのねえ」

「そうそう、男には色々あるわけよ。ありがとうね」

全身をざっとチェックしたところ、ほとんどが打撲と擦り傷で、一番酷いのは眉の上の切り傷のようだ。口の横の傷にも絆創膏を貼ってあげたかったが、食事の邪魔になりそうだからやめておく。

「眉の上は病院で縫ってもらったほうがいいかもね。結構深いみたい」

「そっか……ホント最悪だよ。傷が残ったらせつかくの男前が台無し」

「随分強く頭を打ったのね。精密検査もしたほうがいいみたい」

「ひどい！ 冗談だつてば！」

自分の顔がいいとわかっている男の言い草を茶化して、救急箱を元の場所に戻した。

「さ、食べましょ」

「待ってました！」

彼は「いただきます」と手を合わせて、嬉しそうに食事を口に運ぶ。

「何これ、うまい！」

特に凝っているわけでもないごく普通の食事を「うまい、うまい」と食べる彼を見てみると、胸の奥がズキズキと疼いた。

健吾も最初の頃はこうやって、何でも「うまい」と言って食べてくれていた。でも年を追うごとに、テレビを見ながらだったり、スマートフォンを弄りながらだったりに変わっていつ、そしていつの間にか、目も合わさなくなってたんだっけ。

(まあた余計なことを……)

昔のことを思い出して、舌打ちしたくなる。

「料理上手いね」

「……あ、ありあわせよ」

思わず小さく俯いてしまった。彼はというと、「『ごちそうさま』と手を合わせ、自分が使った食器をキッチンへ持っていきこうとする。

「ああ、いいの、置いといて」

「えー。でも食べさせてもらったし。洗うくらいするよ」

彼のその言葉に、こずえは面喰らってしまった。健吾がそんなことをしてくれたことは一度もない。

食う、風呂、寝るを地で行って、生活費の一円も入れない——そんな男に慣れきって

いたから、自分を氣遣つてくれる行動は新鮮に映る。

しかし――

「ありがたいけど、怪我人に洗ひ物をさせるつもりはないわ。それに、知らない人にキツチンを触ってほしくないの」

自分のエリアを侵されるのは好きじゃない。そうキツパリ言い切ると、彼は流しに食器を置いて神妙な顔で敬礼のポーズをしてきた。

「イエス、マアム！」

「よろしい」

もしかして、キツイ言い方になってしまったかもしれないと思ったのだが、彼が軽く流してくれたお陰で、気まずい空気にならずに済んだ。そこに少し感謝しながら食事を再開する。

ロールキャベツのスープに口を付け、チラツと時計を見ると時間は八時になろうとしていた。そろそろ自分の身支度を整えたいところだ。

シャワーも浴びたいが、自分で連れてきたとはいえ見知らぬ若い男の子がいる部屋でそんなことをする気にはなれない。しかし、怪我をしている相手に、「早く出ていけ」と言うのも酷な気がして言い淀んでいると、彼が首を傾げながら近づいてきた。

「あ。もしかして、今から出掛ける予定あり？」

少し笑って頷く。どうやら察してくれたらしい。

「ごめん！ すっかり長居して!! 僕、もう行くよ！」

汚れた服の入った紙袋を引っさげ、慌てて玄関に向かう彼の身体が心配になって声を掛ける。

「だ、大丈夫なの？ もう動けるの？ もしも辛いならタクシーを呼ぼうか？」

「平気、平気！ お陰でかなり回復した。ここえきちか駅近でしょ？ タクシーは駅で拾うから」
確かに駅は近い。繁華街を抜けて徒歩十分もないくらいだ。

「……そう？ なんか追い出すような形になっちゃったね……」

「全然！ 僕は太助かりだよ！ 優しい人に拾ってもらって、本当にラッキーだった」
「マンション前の大通りを北に真っ直ぐ行った所に総合病院があるから」

「ありがとう。タクシーで行つてみるよ」

彼はそう言つて、玄関に置いていた片方だけの靴を紙袋の中に入れた。片方だけ履くくらいなら、いっそのこと裸足のほうがいいと思つたのだろう。

「ああ、そのクロックス、履いてついでいいよ。それも捨てるつもりだったから」

元カレが使っていたサンダルを指差すと、「じゃあ、遠慮なく」と彼が足を通す。立ち上がった彼は、くるりと振り返つて人懐っこい笑顔を見せてきた。

「どうもありがとう。この御礼はまた改めて」

「御礼なんていいから、早く病院に行つてその眉の上の傷を縫ってもらうんだよ」
「うん！」

出ていこうとした彼だったが、少しだけ振り返ると急に真面目な顔をした。

「あのさ、優しいのは良いことだと思うけど、怪我してるからって、知らない男を一人暮らしの部屋に上げたりしたら危ないよ。僕が悪い奴っていう可能性もあるわけだし」

今更何を言っているんだと、こずえは思わず声を上げて笑ってしまった。その反応に、彼は眉間に皺しわを寄せる。

「笑い事じゃないって！」

「あはは！ そうだね、気を付ける！ あなたももう喧嘩けんかしないようにね」

「わかった」

彼はひとつ頷くと、にっこりと笑った。

「色々、ありがとう。またね」

「気を付けてね」

また——があるかどうかはわからないが、こずえは手を振りながらゴミ捨て場で捨てた男の子を見送った。

2

「ありがとうございます！。またお越しください！」

小料理屋で食事を終えたこずえは、明るい街灯と行き交う車を見ながら、マンションへの道を歩いていた。

健吾と別れてから二週間。こずえは家庭的な雰囲気の小料理屋に入り浸びたっていた。その店は自宅マンション近くの高架下にあつて、五十代半ばくらいの柔和にやみな女将おかみが一人で切り盛りしている。実は知る人ぞ知る穴場だ。

もともと自炊派だったこずえなのだが、最近はもっぱら外食している。食事を作るといつい二人分の食器を並べようとして、そんな自分にげんがりしてしまうからだ。そして何より、元カレが女を連れ込んだ部屋にあまりいたくなかった。

(……全部捨てたのに)

部屋の鍵も替えて健吾の荷物も全部処分して、ベッドだって新しくしたのに、まだあの香水の匂いが残っている気がする。パニラのような甘ったるい、頭に残るあの匂いが

お陰でこずえの帰宅時間は日に日に遅くなっていった。前を向いているつもりなのに、つもりになっていくだけで、実際は向けていない。浮気現場を目撃した時よりも、今のほうが精神的に疲れているかもしれない。元カレが他の女を抱いていた光景にいつまでも囚われている自分が、嫌で嫌で仕方なかった。

時間は二十三時過ぎ。別に待っている人もいないから急ぐ必要もない。こずえはブラとカバンを揺らし、今日の出来事を思い出しながら足を進めた。

(はー。M&Aカー。これからどうなるのかなー)

今日、こずえが勤める会社——「ヒューマンテクニカルサポート」で、社員と契約社員を対象とした朝礼があった。そこで近々会社が他社に合併されることになった、と聞かされたのだ。

社長が高齢の上の後継者がいないための決断らしい。会社を解散するより安定した企業の傘下に入ったほうが社員のためにもいいという結論に至ったのだという。

合併先の会社は「M I K A G Eホールディングス」というファミリー企業で、不動産から小売り、情報通信関係に至るまで、幅広く手掛けているらしい。コールセンター業務を行っているヒューマンテクニカルサポートを傘下に入れて、自社のサービス向上を目指すんだとかなんとか……

二ヶ月後にはM I K A G Eホールディングスの上役が来て、M & Aについての説明会を開いてくれることになっている。

今はテレフォンオペレーターのリーダーをしているこずえだが、卓越したスキルや資格があるわけではないので、この不況の中で転職先を探すのは難しい。

役員が言っていたように、会社が解散して職を失うよりは、合併でも買収でもいいから、働き続けられる状況をつくってくれるほうが断然ありがたかった。

親会社がどこになるかよりも、気になるのは自分の今後がどうなるかだ。

ぐるぐると考えているうちに、マンションに到着した。

六階の一番奥がこずえの部屋だ。

カバンから取り出した鍵を手に部屋に近づくと、玄関の取っ手に白っぽい大きな紙袋がぶら下がっているのが目に入った。

(なに……？ あれ)

真っ先に頭に浮かんだのは、元カレが何か置いていったのかということ。

今までクリスマスはおろか、誕生日でさえプレゼントなんか寄越したことはないけれど、今頃物で歓心を買おうというのだろうか？ それとも嫌がらせ？

不審の念を抱きながら紙袋を開けると、手帳を破ったような切り口の紙が、一番上に入っていた。

力強い字で書かれたその短いメモに、思わず「あつ」と声を上げてしまう。

これは先日ゴミ捨て場で拾ったあの男の子からのものに違いない。

（ああ……あの時の彼か。元気になったかな。もー、こんな気を使わなくていいのに……）

「司」というのが彼の名前なのだろう。紙袋の側面には人気の女性ブランドのロゴが入っている。

彼に気を使わせてしまったことを申し訳なく思いながら、部屋に入って紙袋の中身を広げた。

入っていたのは、冬物のコートとワンピース。そして有名ジュエリーブティックのジュエリーケースだった。

「……うそ……こんなに!？」

コートは通勤にも着ていけるような落ち着いた黒で、四角いバックルのベルト付き。ワンピースは今の季節にピッタリの七分袖で、真っ白なシフォンの生地に黒いリボンで袖に縁取りがされている。そしてジュエリーケースの中には、ティアドロップのトップが付いたネックレスが入っていた。同封のシヨップカードによると、素材はダイヤモンドとプラチナらしい。

どれもこれも趣味が良い。

戸惑いながらも、ジュエリーケースからネックレスを手にとってみれば、繊細な作りのチェーンが手の中で流れた。本当に素敵なデザインだ。繊細で、しなやかで、それでいて上品で、年齢を問わず長く使えそう。

ゆっくりと胸元に当てて、リビングの端に置いてある姿見を覗き、思わず息を呑む。
自惚れでなければ似合っている——気がする。

（嬉しい……）

こんな女性らしいプレゼント、生まれて初めて貰った。

コートもワンピースも肩に当てればサイズはピッタリだ。紛れもない自分宛てのプレゼントに、いつの間にかため息が零れる。

「……嬉しい……。嬉しいけど……」

手の中のネックレスを見つめて、次にラグの上に広げたコートとワンピースに視線を移す。

（こんなに……貰っていいの?）

コートもワンピースもネックレスも——どれも間違いなく高価な品だ。

特にネックレスはプラチナにダイヤモンドということもあって気が引ける。怪我していたところを助けたとはいえ、これは御礼の品としていきすぎだろう。

だが、返したいと思っても返す方法がない。

メモには「司」としか書かれておらず、彼の連絡先もわからないのだ。

「……うーん……」

何度もネックレスを胸元に当てたり外したりしていたが、誘惑に負けて身に付けてみる。すると、それだけで沈んでいた気持ちが高揚してくるから不思議だ。

鏡の中の自分が、このネックレスひとつでパアッと華やいて見える。

(いいのかなあ。こんな高価な物を貰っちゃって……。ああ……。でも本当に素敵……)

躊躇いを覚えながらも、これらを受け取ることにした。それに、この状況では受け取らないわけにはいかない。

「も、貰っちゃおう、かな……。司くん……。ありがたういただきます！」

いつか彼に会うことがあったなら、きちんと御礼を言おう。会うことなんか二度とないかもしれないけれど……

3

「——はいはい、今そっちに向かっていますから！　こう何度も電話してこないでくれま

すか？」

「聞いて、司。私は心配してるの。一人で出歩いたりして、また里中に何かされたらどうするの!?　アイツに酷い目に遭わされたのを忘れたの?　だいたいあなたは——」

自分を助けてくれた人のマンションに立ち寄った帰り道、司は説教がはじまったスマートフォンを耳から離して、俯きながら眉間を軽く押さえていた。

電話の相手は常盤景子。同じ会社に勤務している十歳年上の従姉だ。まだ入社して二年目の司のお目付け役でもある。

面倒見の良い彼女なのだが、ワーカホリックの気がある上に、高圧的でガミガミと口煩い。

ひっきりなしに鳴るスマートフォンにうんざりして電話を取れば、「今すぐ帰ってきなさい」の一点張り。ここで帰らなければ明日から自由に行動させてもらえないかもしれないと思った司は、渋谷ホテルへの帰路についた——というわけだ。

(……まったく、景子サンは僕の母親じゃないだろ……)

だが彼女のしつこい電話が、自分を心配してくれていることだというのはわかっている。——二週間前も、司は今日と同じように出張でこの地に来ていた。そして以前付き合っていた取引先の男に呼び出されて、彼の行きつけだという高架下の小料理屋で、夜中の二時近くまで一緒に酒を飲んだ。

景気がどうだとか、会社の未来がどうだとか、そんな愚痴に近い話を延々と聞かされていたのだが、店を出た途端、突然豹変した相手に殴られたのだ。

『おまえが！ おまえが俺の全てをぶち壊したんだ！ 全部おまえのせいだ!!』

『確かに直接手を下したのは僕ですけれど、一番の原因は他の所にあるんじゃないんですか？』

『うるさい！ 黙れ!』

『僕がいなければ、他の誰かがやりましたよ』

『おまえはやり方が汚いんだよ!!』

『いやいやいや、汚いのはあなたの専売特許でしょう。僕はいたってクリーンですから。あなたと違って後ろ暗いことなんかどこにもありませんし』

脳裏に蘇るのは紅潮した顔を醜く歪ませて、唾を飛ばしながら激高する相手の姿。

普段なら黙って殴られてやる性分ではないのだが、司には自分がそうされる原因に心当たりがあった。そして、大事にするその後々面倒なことになりそうな予感も――

だから仕方がないかと大人しく殴られてやっていたのだが――何発目かの拳を喰らった拍子に雨上がりの地面に足を取られて、迂闊にも勢いよくブロック塀に頭から激突し、脳震盪を起こして気を失ってしまったのだ。

そうして突っ込んだ先が、路地裏にあるマンションのゴミ捨て場。

目が覚めて、自分の状況に愕然としたものだ。

雨で湿ったゴミ袋のベッドは最悪。臭いもそうだが、寝心地は言わずもがな。できることならさっさと退散したかったのだが、気を失っている間に、さらに蹴られたか殴られたかしたようで、思った以上に身体が動かない。スマートフォンは画面が割れて電源が入らず、おまけに切った眉の上からはドクドクと血が流れていた。

頭の傷は大袈裟に出血するものだし慌てることもないかと、とりあえずシャツの袖を当てた。そして雨雲が流れていくのをじっと見上げながら、身体の痛みが引くのを待つ。

これだけ殴られてやったのだから、相手の溜飲も多少は下がっただろう。あとは自分が我慢すれば終わる話で、こんな安い挑発に乗るのは馬鹿がすることだ。と、自分に言い聞かせるが、それでも腹の中のムカムカは収まらない。

『あ――!!』

悔しさから大声で絶叫していると、偶然通りかかった人から蔑んだような視線を向けられる。その時司は、血を流した身体以上に胸の辺りが冷えていくのを感じた。

ゴミ捨て場に倒れている怪我人に関わりたくない気持ちにはわからなくてもないが、ちょっと助け起こしてくれたっていいじゃないか――そう人間不信に陥りそうになった時、一人の女性が目の前に現れたのだ。

(綺麗な人だったなあ……)

倒れている自分を見て、驚きながらも手を差し伸べてくれた唯一（唯一）の人を思い出す。彼女はシャワーと服を貸してくれ、傷の手当もしてくれた。さらには食事まで——サラサラストレートのダークブラウンの髪をアップにしたうなじは、ほっそりとしていて堪（堪）なく色っぽかったし、近づくとはんわりとシャンプーのいい匂いもした。

男物の服がすんなり出てきた時には、この人には旦那か彼氏がいるのだと思って落胆したのだが、どうやら違ったらしい。

彼女はこちらの事情を深く探ってくることはなかった。

怪我の程度以外には興味もないようで、名前を尋ねないどころか、御礼もいらない、貸した衣類も処分してくれていいと言われた。彼女が自分に何も求めていないことがわかると、戸惑（戸惑）うのと同時に眩（眩）しさが増した。

——一目惚（一目惚）れだった。

（参ったな。なんで僕は電話番号を聞かなかったんだ。連絡先を知っていれば、今日会えたかもしれないに……）

あの時は、彼女という存在に舞い上がっていたのかもしれない。自分のバックボーンを知らなくても、純粹な善意だけで動いてくれる人の存在に。

名前や連絡先は知らないが、自分は彼女の住んでいるところを知っている。ここに来れば必ず会えると高（高）を括（括）っていたのに、彼女は留守だった。しかも何時間待っても帰っ

てこない。

御礼の品を渡して、きちんと自己紹介もして、さらに食事に誘うという司の計画は台無しだ。

助けてもらった時の情けない姿を扨（扨）拭（拭）しようと、一番気に入っているブランドスーツに身を包み、会社の女性達からも「今日は一段とかっこいい」と言われるくらい男っぷりを上（上）げてきたというのに——彼女に会えなければ何の意味もない。

景子からはうつつとういしいほど電話が掛かってくるし、明日は仕事がある。さらに明後日の朝にはここを離れることになっている。次はいつ来ることができるかわからない。

完全に当てが外れた司は、彼女へのプレゼントをドアノブに引っ掛けると、後ろ髪を引かれる思いでマンションをあとにしたのだ。

（ああ……気に入ってくれるかな……気に入ってくれるといいんだけど……）

置いてきたプレゼントを思い浮かべているうちに、不安になってくる。

女性の服なんて買ったことがないから、本当なら景子にでも相談したほうが良かったのかもしれない。だが、司は結局、まったく知らない彼女のことをあれこれ考えながら、すべて自分で選んだ。

司は彼女に助けられたことを、景子をはじめ誰にも話していなかったのだ。

彼女と自分のことに、第三者を入れたくなかった。彼女のことは自分で考えたかった

し、御礼の品物だって人任せにせず全部自分で選びたかったのだ。

(僕の見立てでは似合うはずなんだよなあ……絶対！)

脳裏に、自分が選んだ品を身につけて笑ってくれる彼女の姿が浮かぶ。助けてもらった日から、司の頭からは彼女が離れない。

あの人もっと話してみたい。もっとあの人のことが知りたい。あの人の気を引きたい。できることなら――

(あー。会いたかった……ちくしょう、なんで会えないんだよ……)

トボトボと夜道を歩きながらため息をつくとき、司は眉の上の傷を指でなぞった。三針縫ったあの時の傷は、まだうっすらと引き摺った跡が残っている。

自分の怪我の具合以外、まるで関心がなさそうだった彼女を思い出していると、電話の向こうで甲高い怒鳴り声があった。

「――ちよっと司、聞いているの!？」

「はいッ！ 聞いてます!!」

本当は右から左へ聞き流していたのだが、景子の言いそうなことなんて今までの経験である程度わかっている。そして彼女の気を逸らすには、仕事の話を振るのが一番いいことも。

「あー景子サン。そんなことよりもですね、明日の打ち合わせですけど、金額の交渉ま

で持っていきたいと思ってますんでそのつもりで」

「さすが司。ちゃんと仕事のことも考えているのね。交渉はあなたに任せるわ」

案の定、電話の向こうで景子が色めき立つ。

「了解です」

それじゃあ――と電話を切ろうとすると、景子に止められた。

「司、タクシーで戻ってくるのよ。わかったわね?」

有無を言わさぬ景子の命令に、聞こえないくらいの小ささで嘆息すると、

「……イエス、マアム……」

とだけ返事をして、言われた通り駅前でタクシーを拾う。乗り込む前にあの人の住むマンションの方を少しだけ振り返った。

第二章 逃げる条件と、逃がさない条件

1

翌日の土曜日。こずえは司に貰ったネックレスを身に付けて出勤した。

土日は出勤だが、次の月曜は休みだ。休みになったら、貰ったワンピースを着て出掛けるのもいいかもしれない。新しくオープンした駅前のカフェにでも行ってみようか。

そんなことを考えながらも淡々と業務をこなして、十八時の定時にタイムカードを押す。

ロッカールームで制服から私服に着替えていると、後輩が声を掛けてきた。

「和泉リーダー、お疲れ様ですう〜」

この耳に残る甘ったるい話し方をするのは、船木美優。二十二歳で、茶色い髪を巻き毛にした小悪魔系の女の子だ。ストーンをちりばめた派手なネイルをしているが、コールセンターは比較的規則が緩いため、何も言われることはない。

美優自身も、「ネイルとか髪型とか自由だからあ、ここで働いているんですう〜」と公言していた。

「あ、お疲れ様〜」

「ああ〜っ！ そのネックレス素敵〜。いいなあ〜カレシさんからのプレゼントですかあ？」

「…………う、うん…………まあ、ね…………」

胸元を開けたシャツの隙間から覗くネックレスが誇らしい反面、カレシからかと思われて「違う」と言えない自分の虚栄心が情けない。

そんなこずえの心境など知らない美優は、三枚重ねたつけ睫毛をバサバサと上下させながら、胸の前で指先を組み合わせて可愛らしく首を傾げた。

「いいなあ〜。確かお付き合ひ長いんですよね〜っ？ そろそろご結婚ですかあ？」

無邪気に聞かれた「結婚」への問い掛けが、胸にズキンと突き刺さる。

二十九歳——周りから、結婚への地味なプレッシャーを感じるのは気のせいではない。「…………ま、今のところは、そういうのはないかな…………」

知らないわよ！ こちらと男と別れたばかりよ！——だなんて言うわけにもいかず、さっさとロッカーを閉じて、「お先に」と、足早にロッカールームを出ていく。後ろから美優の、「お疲れ様でしたあ〜」という間延びした声が聞こえてきた。

人と乗り合わせるのも億劫おっくうになり、エレベーターではなく階段に向かう。まったく……自分はいったい何と戦っているのだろうか？ どうして、「彼とは別れたの」と正直に言えないのだろうか。

(言えるわけないわよ……)

「別れた」と言えば、「どうして？」と聞かれるのは自然の流れ。健吾とは二十歳から九年間も付き合ってきたのだ。交際が長続きする秘訣ひけつは？ だなんて聞かれたのも一度や二度じゃない。二人のことを知っている人は多かった。

別れて二週間。どん底まで落ちたこの心は、まだ救われていない。

「よお、こずえ」

会社を出てすぐのところで声を掛けられたこずえが振り返ると、歩道の植え込みに腰掛けていた人物が立ち上がった。

朝夕は涼しくなっているのに、夏と変わらずジーンズとTシャツというラフな格好で片手を軽く上げて近づいてくるのは、ジムで鍛え上げた厚い胸板を持つ大柄な男。

少し茶色の短髪を掻き上げながら爽さわやかに笑う彼こそ、別れた元カレ——大杉健吾だった。

「……け、健吾……どうして、ここに……」

「んー、そろそろおまえが俺に会いたがってるかなーって思ってたさ。俺、今日休みだし来てやった。おまえ最近部屋にいねーのな？ 友達うちな家にも泊まってんの？ 電話も出ねーしさ。ってか、鍵くれ。中に入れねーし」

自分の浮気が原因で別れたのを忘れたかのように、彼は笑みを浮かべる。その恩着せがましい物言いに苛立ちを感じて、無意識のうちに奥歯をガリツと鳴らした。

確かに最近帰宅時間も遅く、しかも不規則だ。健吾からの電話もメールも着信拒否している。さらにマンションの鍵も替えたこの状況で、確実にこずえを捕まえないと思えば会社付近で待ち伏せするのが一番だろう。

そうまでして健吾が自分に会いたがった理由を思うと、襟えりから冷水を入れられたようにゾツとした。

「鍵なんか渡すわけじゃないじゃない……帰ってよ。わたしは会いたくなかったわ」

かなり背の高い健吾を睨み上げ、低い声で威嚇いかくしながら前を通り過ぎると、後ろからガシツと肩を掴まれる。

「待てよ、こずえ」

「離して！」

その手を振りほどこうと身を振ぶるが、健吾はより一層力を込めてくる。そして大声で

こずえの名前を連呼してきた。

「つたく、こつち向けて。おーい、こずえ！ こーずーえー!! こーずーえー!!」
「やめて！ 大声で呼ばないで！」

ここは会社の目と鼻の先なのだ。こんな痴話喧嘩ちわげんかを見られたら、職場の人になんて思われるか！ 行き交う人々の視線を気にして慌てるが、健吾の口は止まらない。

「なー？ こずえ、そう怒るなよ。俺が悪かったって。反省してるから。な？ やり直そうぜ」

初めて健吾の口から謝罪らしい言葉が聞こえて思わず黙ると、すかさず彼が真剣な眼差しで顔を覗き込んできた。

「こずえ、許してくれ。アイツは遊びなんだ。俺が結婚したいのはこずえなんだって！」
「……けつ、こん？」

結婚という言葉にピクッと頬を引き攣つからせると、健吾がニヤリと笑って迫ってくる。その身体から、ふわりとどこかで嗅かいだことのある香水の匂いがした。

（あ、これ……）
間違いない。健吾が部屋に連れ込んだ女が付けていた香水だ。

あの、バニラのような甘ったるい匂い——
「そう、結婚。俺もおまえも二十九だし、そろそろ、な？ 結婚したら、さすがに俺だっ

て落ち着くし、あれは結婚前のハシカみたいなもんだって！ なあ、わかるだろ？ ン
なキレんなよ」

（何がハシカよ！ ふざけんじゃないわよ!?!）
健吾からあの香水の匂いがあるとすることは、彼はあの女と直前まで会っていたのだろう。それでよく「結婚」だなんて言える。彼はこずえが「都合のいい女だから結婚したい」のであって、「好きだから結婚したい」わけではないのだ。

向かい合ったまま彼を見つめると、こずえは怒り狂う胸の内を抑えて柔らかく笑ってみせた。

「……健吾……」
「こずえ」

健吾は真剣な顔をしているつもりなのかもしれないが、こずえが笑いかけた瞬間から彼の瞳には誠実とは程遠い色が浮かび、口元はニヤけたように緩んだ。その醜悪みにくともいえる表情に落胆して、自然と肩が落ちてしまう。

かつてどれだけ尽くしても惜しくなかった男が、目の前の人物と同じとは思えなかつたし、思いたくなかった。

こずえは両肩に置かれた健吾の手を軽く払って、胸に溜ためまっていた落胆の気持ちをはき出した。

「結婚？ 馬鹿にするのもいい加減にして。わたしはあなたの『都合のいい女』に戻るつもりはないわ。わかったらさっさとどっか行つて。九年も時間を無駄にしたわ……これ以上あなたに構つて自分の時間を無駄にしたくない。もう二度と目の前に現れないでちょうだい」

低い声で冷静にそう言うと、健吾は一瞬呆けたように目を見開いた。彼は結婚をチラつかせれば、こずえがなびくと本気で思つていたらしい。

「は——？ おまえ、今、なんて言った？」

「聞こえなかったの？ 『時間の無駄。もう二度と目の前に現れないで』つて言ったのよ」顔を上げ、キツと鋭く睨み付けてやると、思惑が外れたことに気が付いたのか、健吾の眉が吊り上がった。

「——っ！」

反論する言葉を失つた彼の平手がパツと振り上げられる。

（——打たれる!!）

こずえは反射的に目をキツク閉じた。が、何時まで経つても痛みはこない。恐る恐る目を開けると、そこにはスーツ姿の見慣れない男性の後ろ姿があった。

「お、おまえ誰だよ！」

振り上げられた健吾の手首を掴んだその人は、健吾の怒声を無視して、くるつと振り

向いた。

「こずえさん、大丈夫？」

——誰？

と言いかけて、ハッと息を呑む。

柔らかくウェーブした前髪、こずえよりも少し高い背に、ぱつちりした二重瞼。以前は青く腫れ上がっていた口元も、今は本来の色を取り戻していて白い。

紺色の細身のスーツに爽やかな青いネクタイ姿で、ニコニコと親しげな微笑みを見せるのは、ゴミ捨て場で拾ったあの男の子だった。

「あ、あなた……っ、司……くん？ ……怪我は？ もういいの？」

昨日貰ったメモに書かれていた名前を恐る恐る呼ぶと、彼はますます笑みを深くした。「こずえさんが手当てしてくれたお陰で、ほら！」

健吾の手を振り払うと、司はこずえに向き直り、自分の前髪を上げて傷のあった眉の上を見せてきた。うっすらと引き攣った線が入っていたが、もうほとんど治っている。

「そう……良かった……」

ホツとして笑いかけると、彼がプラチナとダイヤモンドが飾るこずえの首筋をそつと撫でてきた。その流れるような手付きに驚いてビクツと震えはしたものの、不思議と嫌な気はしない。

「僕があげたネックレス着けてくれてるんだ。とても似合ってるよ」
 「ネックレスも他のプレゼントもありがとう。どれも素敵だった。でもなんだか申し訳なくて……」

御礼を言つて少し頭を下げると、司は笑つてくれた。

「ううん、あれぐらいさせて。僕が選んだ物をこずえさんが身に着けてくれることが嬉しいから」

そう言つた司の唇が、軽くこずえの首筋に触れる。

(え!!?)

突然のことに対応できずに硬直していると、彼はスツと目を細め、司の背後で棒立ちになっている健吾に向き直る。年も体格も健吾のほうが上なのに、彼が怯んだ様子はない。そして彼は、ゾツとするような冷たい声を放つた。

「で？ 僕の大事なこずえさんに何か用ですか？ こずえさんは、あなたとはもう別れてるはずですけど？」

(だ、大事な……？ 僕の？ 誰が——?)

自分の名前がそこに入つていても、意味がわからずに司の横顔を見つめたまま呆けてしまう。

その間に、健吾は司に向かつて凄んでいた。

「外野はすつこんでろ！ 俺が用があんのはそっちの女だ。それとも何か？ おまえが

そいつの新しい男だつてーのかよ？」

「そうですよ」

(なっ！)

突然の予想だにしない展開に目を白黒させていると、健吾がありえないと言いたげに嘲笑つた。

「は？ こずえに新しい男？ バカ言つてんじゃねーよ。おまえどう見てもこずえより年下だろ？ そいつ二十九だぞ」

「だから？ 僕は年上の女性が好きなんです。だいたい、愛に年齢なんて関係ないでしょう？」

路上で二人の男が繰り広げる口論の中心に自分がある。なのに話についていけない。完全に置いてけぼりになっていると、含むような笑みを浮かべた司が囁いてきた。

「……僕と付き合ってるって、言っちゃえ」

(えっ!?)

弾かれたように息を呑むと、彼はスリスリと顔を寄せながらこずえの手に指を絡めてきた。それはとても近い距離で、ほろ苦いコーヒーの匂いがして思わず胸がドキンと跳ねてしまう。彼の吐息が耳にかかつて、最近ではまったく感じることもなかった懐かし

い緊張が、じわつと頬を紅潮しやうちようさせた。

(こ、恋人のフリ……してくれる、つてこと……だよね……これ……)

こずえは迷わずその提案に乗った。健吾から逃げ切るには、もうこれしかない。

「今わたし、この人と付き合ってるの。あなたはあの彼女とよろしくやってれば？」

思いつき司に身を寄せて強気に微笑むと、さらに彼が追い打ちを掛けた。

「こずえさんの部屋にあったあなたの荷物は全部処分されてますし、あなたの居場所はもうないですよ。ね？ こずえさん？」

「ねーっ」

司と二人して頷き合うと、健吾の顔が引き曇った。

「はあ？ ふざけんな、勝手に捨てんなよ、俺のだから！」

「買ったのは全部わたしよ。文句があるなら、わたしが貸してるお金を返してから言つて！」

九年の間に貸していたお金のことに触れると、さっきまでの勢いはどこへやら、健吾は急に押し黙った。目尻を陰しく吊り上げて、歯ぎしりをしながら鋭く睨み付けてくる。

その沈黙は、彼にとつてこずえが「都合の悪い女」になった瞬間の現れ――

(……わたしを好きだつて気持ちはないんだね……)

彼には他の女がいる。だから自分は愛されてなんかいない。

わかりきっていたことに今更傷付いてしまう自分の弱さを感じながら、キュツと唇を噛んだ。

その時、司にくいつと手を引かれた。

「こずえさん。こんな人ほつといて、ご飯食べに行こうか？ 僕、お腹空いたんだよね」

沈み込んだこずえをよそに、あつげらんとした声で司は沈黙を破った。

「そ、そう……？ じゃあ、そうしよつか！」

こずえは司に話を合わせて、もう何も言わない健吾を無視して彼に付いていく。

しばらく歩いても、健吾は追ってきたりはしなかった。

健吾と別れられたのだから、もっと清々せいせいした気持ちになればいいのに、実際はジクジクと胸が痛む。そして同時に、健吾があれで納得したとも思えないという不安が、心のどこかにあった。

(でも、これで良かったはず)

そう思わないとやってられない。

俯うつむいたこずえを励ますように、司が明るく話を振ってきた。

「このまま本当に食事に行こう？ 近くに美味しい店があるんだ。僕、案内するから」

「……で、でも……」

助けてもらつたとはいえ、よく知らない男に付いていってもいいものかと躊躇ためらつてい

ると、彼は人懐っこい、それでいて甘えたような笑顔を見せてきた。
 「ねー、どうしてもだめ？ 恋人役の僕がこんなに頼んでるのに？」
 彼に見つめられると、なぜか嫌だなんて言えなくなる。確かにさっきは彼のお陰で助かったのだ。それに、この人畜無害そうな綺麗な目を見ていると、食事くらいならと思えてくる。

「……だ、だめじゃ、ないけど……」

「はい、じゃあ決まり！ 今から電話で予約しよう」

スマートフォンを取り出した司は、あつという間に店に予約の電話をってしまった。

「あっ！ も、もう……勝手に!!」

「えへへへ」

こずえは、強引な彼のペースに吞まはれはじめていた。

2

「……わ……凄いな……綺麗……」

闇の中に宝石をばら撒いたような夜景に、こずえは感嘆の声を上げていた。

ここは海岸沿いのホテルの最上階にある、メインダイニングだ。こずえの職場からタクシーを十分程走らせた所にある。

BGMはグラランドピアノの生演奏。提供される食事は正統派フランス料理。客層も落ち着いていて雰囲気がいい。こんな小洒落たお店が近場にあるだなんて知らなかった。

こずえはスタッフにメニュー表を返す男——司に、緩慢な動きで視線を向けた。

「僕が勝手にメニュー決めちゃったけど良かったの？」

「あ、うん……良いよ。司くんの好きなのを食べて、わたしが払うから」

値段は高そうだが、こういう店ならクレジットカードが使えははずだ。今も助けてもらったことだし、それに司からは色々プレゼントを貰いすぎている。ここの払いでトントンになるとも思えないが、御礼に自分がごちそうしよう。

（とりあえず、食事に付き合ったらすぐに帰ろう。なんか今日は疲れたわ……）

健吾と会ったせいとか、疲労がどつと襲ってきた気がする。こずえが再び視線を夜景に向けようとすると、司が声を上げて笑った。

「やだな。こずえさん、誘ったのは僕だよ？ 僕が払うって」

「……いや、でも、助けてもらったし……」

「僕も助けてもらいましたー」

「その御礼はもう貰ったわ。十分すぎるくらいにね。だから、それとこれは別よ」

そう言って胸元に手をやると、ネックレスのひんやりとした感触が指先に当たってハツとする。まだ彼に助けてもらった礼を言っていない。

「……ごめんなさい。わたし、ちゃんと御礼を言えてなかった。助けてくれてありがとう。もう気が付いていると思うけど、あの元カレで……ちょっとこじれちゃって……だから彼氏のフリしてもらって助かった。本当にありがとうございました」

ペコリと頭を下げながら言うと、司は「やめてよ」と慌てたように首を横に振った。

「僕がしたくてしたんだよ。お願いだから、そんなにしないで。ね、こずえさん！」
椅子から少し腰を浮かせた彼の声为本気で焦っていたようだったから、こずえはゆっくりと顔を上げた。

さつきから——いや、正確には再会した時から気になっていたのだが、彼はずっと「こずえさん」と名前前で呼んでくる。

「……あの……ところで、どうして司くんはわたしの名前を知ってるの？ 名前教えてっけ？」

「ええ？ あれだけ大声で、『こずえーこずえー』って呼ばれてたら、ねえ？」

同意を求めるように語尾を上げながら、司は「聞きたくなくても聞こえちゃうよ」と、クスリと笑った。彼は本当によく笑う。その笑顔には厭味いやみがなくて、とても感じが良い。仕事帰りなのか、イタリアンスタイルのスーツを着ている。そのデザインはスタイリッ

シュで、彼の身体のラインを強調していた。スラックスの裾が細いせいで、脚を組むとたまらなくセクシード。そのスーツ姿は、彼を落ち着いた男性に見せていた。くりくりとした目は幼さを感じさせるはずなのに、そこに男の色気を持ってこれると、まったく違う印象になる。そのギャップからか、こずえは落ち着かない。彼は本

当に、あのゴミ捨て場で倒れていた男の子なのだろうかとさえ思えてくる。
健吾との口論を聞かれていた気恥ずかしさと、屈託なく笑いかけてくる司の視線に耐

えられなくなつて、自分でも知らぬ間に俯うつむいていた。

(……恥ずかしい。全部、健吾のせいよ……)

胸中で元カレを罵ののつて小さくため息をつくとき、ソムリエがワインを運んできた。

「来たよ。ワイン飲む？」

「ええ。いただく」

これが飲まないでやってられるか。ワインが注がれたグラスの細い柄を持ち上げると、司がカツンとグラスを合わせてきた。

「別れられて良かったね。僕ね、女性に手を上げる男って大嫌い。合わないよ、こずえさんにああいう男は」

嫌悪感を滲にじませた声でそう言われる。こずえは少し苦笑いして、グラスに口を付けた。実を言うと、健吾に暴力を振るわれたことは一度もない。今日が初めてなのだ。今ま

で、何もかも健吾の思い通りにしていたから。

「……そうね……。でもね、あんな人じゃなかったのよ、前は……」

一度は同意しながらも、すぐに「でも」と否定を並べて健吾を庇う。すると、司は少し眉を寄せた。

「……もしかして、あの人と別れたこと……後悔してる？ 僕、余計なことしちゃった？」

「それはないよ」

即答する。

それだけはない——健吾と別れた自分の判断は間違っていないと今でも思っている。ただショックだったのだ。他の女の匂いを漂わせているにもかかわらず軽々しく結婚を口にし、お金を返せと言われれば押し黙り、最後には追いかけてくることもなかった、健吾のその態度が。

昔の彼は違った。

出会った時の健吾は大学のサークルのムードメーカーで、多少派手なところもあったけれど、男女関係なくみんなに慕われていて、本当に魅力的だった。そんな活発な彼がこずえは好きだった。

好きだから、もつと笑ってほしかった。自分ができていることで彼が喜んでくれるなら——そう思って彼が望むことをしてただけなのに、どうしてこんなふうになってしまった

のだろう。何がきっかけなのかも思い出せない。いつの間にか彼は変わっていたのだ。

（健吾の変化に気付けなかったことは……わたし、健吾をちゃんと見てなかったのかな……）

どうして彼の浮気を見落としていたのか。彼に尽くす自分に酔ってはいなかったか。彼をあんなふうにしてしまったのは、この九年間一緒にいた自分ではないのか——

こずえが黙ると、司はテーブルに肘を突いて目を閉じ、しばらく無言になった。やがて彼はゆっくりと臉を持ち上げ、同時に尋ねてくる。

「……ごめんね、立ち入ったことかもしれないけど、聞いてもいい？」

頷きながら先を促せば、司はテーブルから肘を下ろしてじっと見つめてきた。

「あの人と何があったの？」

本当は話したくない。自分が惨めな思いをしたことなんか口にしたくない。けれど——こずえはクイッとグラスを一息で呷ると、情けない自分を嘲るように口元だけで笑った。

「……浮気されたの、わたし」

話したくなかったはずなのに、口にしてしまえば楽になる。

こずえは今まで誰にも見せることのできなかつた心の傷口を、司の前に無防備に晒していた。

「——それでね、健吾と一緒に部屋にいた女の子に、『都合のいい女』って言われたの。シヨックだった……目の前が真っ白になって……わたしの九年間は何だったのかった。だから今、あの部屋に一人でいるのがちよつと辛い……」

出された何皿目かの料理をフォークでつつきながら、こずえは健吾との出会いから別れまでの全てを、司に話してしまっていた。

目の前の司は、「酷いね……」と何度も相槌あいつちを打って、親身になって話を聞いてくれる。そうやって聞いてもらえるだけで、ここ最近感じ続けていた重苦しさから解き放たれる気がした。

六杯目のワインをギューツと一息で飲み干すと、自分でもわかるほど酒臭い息が吐はき出される。

さつきから飲んでばかりだが、司は何も言わずに空になったグラスにワインを注いでくれた。飲みなれないワインがやけに美味しく感じるのはどうしてだろう？

「……好きだったんだね。あの人が」

ポツリと零れてきた司の感想に、胸が刺されたように痛んだ。

好きだったから、彼の裏切りがこたえたのだ。好きじゃなかったら、こんなに深く傷付いていない。こんな酷い終わり方はしたくなかった。

ぼろっと零れ落ちてきた大粒の水滴が、七杯目のワインを波打たせる。その波紋を見て、こずえは自分が泣いていることに気が付いた。

「……あつ……ご、ごめんなさい……どうしたのかな、急に、わたし……」

一度零れてしまった涙は、次の雫しずくを呼んでくる。

飲み過ぎてしまったのか、感情がセーブできなくなつて、視界に映る全てがぼやけてしまう。

慌ててハンカチで顔を隠したが、目の前の司にはバッチリ見えているようだった。

「出ようか……。来て。少し落ち着けるところに行こう」

料理はまだ途中だったが、チラチラと周りの視線を感じたこずえは、顔を押しさえて立ち上がった。

ホテルの人に事情を説明した司に手を引かれて、何も考えられずにエレベーターに乗る。そのまま案内された先は、中央にダブルベッドが置かれた広い部屋だった。奥にはローテーブルやソファもある。どう見ても客室だ。

「……いこ……」

「うん。ホテルの人に用意してもらった」

「ごめんなさい……」

また迷惑を掛けてしまったと、自分に嫌気が差す。ハンカチを握り締めたままこずえが俯くと、彼はジャケットを脱いでソファに腰を下ろし、自分の隣を軽く叩いた。

おいで——そう言われている気がして近づくと、身体を引き寄せられて、彼の膝の上に座ってしまふ。そのまま強く抱き締められる。スーツのジャケットから、香水とは違うほろ苦い匂いがした。

「っ！」

突然のことに驚いて身体を硬直させていると、ポンポンと優しく頭を撫でられる。

そのあやされるような手付きにカッと顔が熱くなって立ち上がろうとした時、頭上から司のしっとりとした声が響いてきた。

「こずえさんは……もっと自分に優しくしてあげればいいのに。なんだか自分を責めるように見えるよ。自分が悪かったのかもしれないって思っていない？」

——思ってる。

健吾との終わりには、もっと別の道があつたんじゃないかと頭のどこかで考えている自分がいる。浮気される側にも原因があるのよと、嗤う声^{わら}が自分の中にある。

思わず目を見開いて顔を上げると、眉間に小さく皺^{しわ}を寄せた司と視線がかち合った。

同情とは違う、まるで自分が苦しんでいるかのような表情をしている。

「こずえさんは悪くないよ。人よりちょっと優しくすぎるだけ」

「……わ、たし、そんな優しくなんか、ないわ……」

否定するこずえの唇は震えていた。

「そう？ 会ったこともない僕を助けてくれたでしょう。ああいうのを優しいって言うんじゃないかなあ？」

黙っていると、より一層強く抱かれて、温かい胸に顔を押し付けられた。

「こずえさんは優しいんだよ。その優しさを、自分にも向けてあげられたらいいのね。今のこずえさんに必要なのは、思いっきり泣いて自分を解放してあげることなんじゃないかな？」

何度も何度も頭を撫でられながら耳元で囁かれた言葉が、やたらとストンと胸に落ちてきたのは、酔っているからだだろうか？

一人になってから、今日まで一度も泣いていない。泣かないことで必死になってプライドを護ってきたはずなのに、そのことが余計に自分を苦しめているのだろうか——ろくに素性^{まも}を知りもしないこの男の子が、自分をとてもわかってくれているような気がした。

「自分で自分の気持ちを受け止められないなら、僕が代わりに受け止めるから、泣い

「ちゃえ。ね？ 泣いていいんだよ」

優しい声に導かれるまま、こずえは知らず知らずのうちに嗚咽を漏らしていた。司のシャツに涙の染みが広がっていく。

「……………う、ふっ……………ああ、うああああ……………ああ……………なんでえ？ ……なんで……………うう……………うあ……………」

「うん、うん……………。辛かったよね、なんでって思うよね……………」

「好きだったの……………一緒にいたかっただけなの……………それなのに……………それだけなのに……………ううっ……………」

「……………うん……………わかるよ……………大丈夫だよ。僕で良かったらこずえさんの側にいるからね……………」

泣いて、泣いて、まるで子供のように声を上げて泣きじゃくった。

悲しさも、悔しさも、惨めさも、全部一人で受け止めるには重たすぎて、押し潰されそうになっていたのに、そんな弱い自分を認めたくなかった。人に自分の弱さを見せるのが嫌だった。でも本当は、弱い自分を肯定してもらいたかったのかもしれない。そして、誰かにこうして抱き締めてほしかったのかもしれない。

泣きすぎてぼーっとした頭では、これ以上深く考えることができなかった。

自分を抱き締めてくれる温もりが、言いようもなく心地良い。このままこの温も

立ち読みサンプルはここまで

りの中にいたい——そう思った時、顎をゆつくりとすくい上げられて、唇に柔らかいものが押し付けられた。

（え……………？）

腫れぼったくなった頬をめいっばい開くと、ぼやけた視界に司の顔が広がる。

自分が彼にキスされていることに気が付くまで、ゆうに十秒はかかっていた。

「あ、んっ……………」

小さく声を上げた際に、司の舌先がぬるりと口内に入り込んでくる。くちゅくちゅと舌を絡められる。久しぶりのキスに身体の内側から揺さぶられて、思わず目を閉じた。

その間もキスは繰り返される。

唇を甘く囁まれ、吸われる。口内を探るように巧みに動かされる舌に翻弄されている間に、羽織っていたジャケットが落ちる。

自分が脱がされていることがわかっていても、こずえは抵抗できずに司の腕の中にいた。

ゆつくりと頬を撫でてくる彼の体温に絶りたくなる。濡れた唇を指先で拭かれて、躊躇いながら目を開けると、彼が額を重ねてきた。

沈黙の中に自分の心臓の音が響く。それを破ったのは、少し掠れた彼の声だった。

「……………ねえ、辛いことを僕が全部忘れさせてあげるって言ったら、こずえさんはどうす